

## 15 マントン 空に舞う

### フラメンコの小物その1

フラメンコ舞踊を語る上で欠かせないのが小物づかい。フラメンコには様々な曲種があり、それだけでも十分に变化があるのですが、そこに小物が加わることで、さらなるバリエーションが生まれます。小物づかいもフラメンコの魅力の一つであることは間違いありません。

なお、ここでいう小物とは、フラメンコ舞踊で使用する衣装以外のアイテムのことです。広い意味では楽器であるカステネットや特殊な衣装であるバタ・デ・コーラなども小物に含まれることもあります。まずはフラメンコの粋、華やかなマントンから見ていくことにしましょう。

#### マントン／その起源と歴史

マントンとはショールのこと。女性が肩をおおうものとして、15世紀にはすでにポピュラーでした。フラメンコの舞台を彩る、華やかな刺繍を施したショールはマントン・デ・マニラ、マニラのマントンとよばれます。華やかな



パストラー・インペリオ Museo Sorolla  
 ソロージャ美術館に保管されているパストラー・インペリオの写真。ソロージャの描くカフェ・カントンテの絵に同じポーズの女性が描かれています。彼女はロメロ・トーレスのモデルにもなっています。

刺繍を施された絹地は中国、広東地方の名産ですが、もともと輸出用だったようです。それが当時スペイン領だったフィリピンのマニラから送られてきたので、マニラの、という名前がつけました。輸入が始まったのは18世紀から。まずメキシコで流行し、スペインでも19世紀にはセビージャのタバコ工場の女工が着用し、一般に広まっていきました。20世紀初めにはセビージャ郊外などでも作られるようになっていたと言います。ちょうどフラメンコの興隆期であり、カフェ・カントンテの時代の、古いアルティスタの写真を見ると、女性は歌い手、踊り手を問わず、皆と言っていいほど、マントンをまとっています。このようにして、外国のものがスペイン的なものと認められ、絵画や小説などにも取り上げられるようになっていったのです。

#### 体を覆うものが空に舞う

もともとは装飾品であり、体を覆うものですが、それを空に舞うようひるがえすのはいかにもフラメンコらしい自由さと言えるのではないのでしょうか。衣装としてだけでなく、舞踊のアイテムとして使うようになったのがいつ頃からなのか、詳しくはわかりません。マントンやバタ・デ・コーラの巨匠として知られるマティルデ・コラルはパストラー・インペリオの踊りを観て学んだ、と言います。確かにパストラーのビデオではソレアの最初にマントンを手に踊るところがあります。

以後、マントンのテクニックはおおいに発展してきました。ブランカ・デル・レイの『マントンのソレア』は、マントン七変化ともいうべき振付で、マントンをばたかせるだけではなく、

ペールのようにかぶったり、身体に巻きつけたり、と様々な顔を見せてくれます。伝統的には、ソレアやカーニャ、そしてアレグリアス系の曲で使われることが多いようです。

#### 選び方

マントンを舞踊で使う場合はその人の身体に応じたサイズを選ぶ必要があります。また、美しい軌跡を見せるためには、ある程度の重さがあるものを選ぶことも重要です。フレコ、フリンジも短すぎたり本数が少なかったりするときにいい見えません。伝統的には真四角のシルク地に手刺繍が基本。マントン自体の大きさや刺繍の多さや布地の厚さなどで値段が変わってきますが、手作りということもあり、高価です。刺繍の柄は花や鳥などが主ですが中国起源ということで、中国庭園風景などのものもあります。ほかに、無地のものや柄のある布にフレコをつけたものなどもあります。また、ポリエステル地のものや機械刺繍に既成のフリンジを付けた安価なものもあります。

#### カバ

現在では男性がマントンを使うことも珍しくありません。スペイン国立バレエ団監督のルベン・オルモはそのマントンを使った振付で名を馳せました。が、かつては、マントンは女性のもので、男性が使うのは女性から受け取るなどの場合だけでした。その代わりに、と言えるかどうかはわかりませんが、男性はマントンと同じようにカバをひるがえして踊ることがあります。カバとはケープ、マントのことで、男性の防寒用です。これを使ったカーニャを



©Stanislav Belyaevsky

BNE  
 マントンの妙技といえばこれ。ブランカ・デル・レイのマントンのソレアは国立バレエのレパートリーとして受けつぎました。



Bienal Oscar Romero  
 2018年のビエナルでのマリア・モレーノ。両手でも片手でも自在にマントンを操る。最近、パタやマントンを使える若い踊り手が増えているのは嬉しい限りです。

創作したのはグラン・アントニオでした。また、スペイン国立バレエ団『ダンサー・イトロニオ』など、スペイン舞踊の作品で使うこともあります。

## マントンシージョ、 マンティージャ

小さいマントン、という意味のマントンシージョは、別名ピコ、角というように角のある三角形で衣装の上に着用するものです。マントンのように使ったりすることはまずありません。マントン同様、シルク地に刺繍のものもあれば、無地や柄物、レース地やレース編みなど、マントン以上にバラエティに富んでいます。最近ではフレコを編んだだけの物を首に巻くものも流行っているようです。

マンティージャはレースのショールで、女性の頭を覆う布、ベールが、17世紀からスペイン独自の発展を見せたものです。18世紀には現在、一般には聖週間に黒、フェリアや結婚式に白もしくは象牙色のものを、大きな飾り櫛ペイネータと合わせて装着します。フラメンコでも作品ものの衣装として使われるほか、マンティージャをマントンのように使うこともあります。

マントンは舞踊で使うだけではありません。一般の人たちもフェリアなどお祭りの時や結婚式などフォーマルなお出かけにマントンでおしゃれをしたりします。親から子へ孫へと受け継がれたアンティークのマントンを見かけることもあります。日本の着物のようですね。



1998年のシカゼ  
 ビエナル公演『カディス』の後、チャノ・ロバートと。彼の最高のコンパスとジョーク。「ソブリーナ！」と呼ぶ声が聞こえてきそうです。

志風恭子 / 1987年よりスペイン在住。セビージャ大学フラメンコ学博士課程前期終了。パセオ通信員、通訳コーディネーターとして活躍。パコ・デルシアをはじめ、多くのフラメンコ公演に携わる。